

Title	<大會抄録>明末清初、江南郷紳の権力構造
Author(s)	川勝, 守
Citation	東洋史研究 (1978), 37(3): 452-452
Issue Date	1978-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/153704
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

な史料を寄與する事にもなる。

本論は以上の點をふまえて、地圖の新解釋を示し、都市圖解讀法の開拓をめざすものであるが、手順としてまず蘇州の變遷を地圖から讀みとるを試みる。

明末清初、江南郷紳の權力構造

川 勝 守

今日、明清史研究においては、郷紳論あるいは郷紳問題を取り上げることが極めて盛んであり、一種の流行の感を呈している。しかし、郷紳問題が關係するところと言えば、國家政治から地域社會の運営に至るまでの、各段階における徵稅・治安維持・勸農救恤・裁判教化、さらには市場支配や世論指導等々と言った、極めて廣範圍にわたるものであり、それ故に、この時代の研究者はどのようなテーマを扱っても、必ずや郷紳の問題と結びつくことになる。それだけに、郷紳とかその政治的社會的存在の表現たる郷紳支配なるものの概念規定や、機能・役割評價の特徴ということになると、研究者により様々な事例が抽出され、それにより人ごとになり異なる理解がなされるようである。また、具體的問題を提起すれば、明後期に登場した郷紳存在は、清朝國家の中で全面的に開花するというのが、このことはいかなる歴史事象に即して説明されるのであろうか。本報告は、一般に「郷紳の横」「官府の把持」といわれる事態を、明末、常熟の錢謙益に對する「民」の訴えと、清初康熙中葉に

おける崑山徐乾學に對する訴訟事件との二事例について、具體的に究明することに努力しながら、江南郷紳の權力構造の一つの型を明らかにしてみたい。

資料 「張漢儒疏稿」他（『虞陽說苑甲編』）

「徐乾學等被控狀」（『文獻叢編』四・五）

『史記』の構成と「易」の思想

上 田 早 苗

『史記』は古代の人々が共通して持っていた認識方式（創造）と死（破滅）とが永遠に繰り返えされる——にもとづいて歴史を記述しており、それは循環史觀とならざるを得ない。太古の黃帝（土德）より始まった歴史は、木德の夏、金德の殷、火德の周、水德の秦と王朝が交代するが、王朝滅亡の原因を洪水や暴虐とみなしているのも、民間説話に普遍的に見られるパターンである。始皇の暴虐によつて最大のカタストロフ（破局）を迎え、ここに黃帝以來の文化は盡く滅亡する。しかしこのカオス（混沌）の状況からやがて高祖劉邦が出現し、蛇を斬ってコスモス（秩序）へと轉換し、中國は再生されるのである。『史記』の作者は上古の黃帝より始めて一巡して再び土德に戻った今上武帝の太初元年に至る一周期の通史を著そうとしたのであり、従つて黃帝と武帝との事蹟には類似するところがきわめておおい。王朝の交替を五行にあてて説明するのは、五行相勝説とされているが、しかし司馬遷は「易は天地陰陽四時五